

パンニャーサ・ジャータカに説かれる捨身の目的 ——「声聞、独覚の栄達 (sampatti) を求めず」をめぐる——*

畝 部 俊 也

1. はじめに

東南アジアの様々な地域に「パンニャーサ・ジャータカ」というタイトルを冠する釈尊の前世の物語の集成が様々な形で伝えられている。このパンニャーサ・ジャータカという集成に、自己犠牲 (self-sacrifice)、または、本邦でよく知られた用語を以て言い換えるならば、「捨身 (捨身)」(自分自身あるいは身体の一部を布施すること)、あるいはまた、ジャータカ等で用いられる分類によれば「内施」(ajjhātika-dāna) を主題とする物語⁽¹⁾が多く集められていることについては、特にそのタイに伝わる集成 (ダムロン王子によって監訳された国立図書館刊のタイ語訳版) に基づいて [Sheravanichkul 2008] が報告しているところである。もちろんシヴィ王の物語 (JA no. 499) やウサギ本生 (JA no. 316) のように自分の身体を布施として他者に与える有名な物語がパーリ三蔵小部經典のジャータカ (古典ジャータカ)⁽²⁾の中にも存在している。しかしながら、[Sheravanichkul 2008: 774-6] の調査によれば、こういった自己犠牲の物語は古典ジャータカの547の本生話のうちのわずか7話に過ぎない。これに対して、パンニャーサ・ジャータカ (上記国立図書館版) では、そこに収められた61話のうちの14話 (22.95%) が捨身を主題としており、捨身を主題とする物語の多さは、パンニャーサ・ジャータカという集成の大きな特徴となっているのである。

* 本稿は2009～11年度科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号21520055)、2012～14年度科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号24520052) による研究成果の一部である。本稿は2011年6月台湾の法鼓佛教学院で開催された国際仏教学会にて発表した論文 [Unebe 2012] の前半部分に加筆して日本語化したものである。後半部分の日本語版は『パーリ学仏教文化学』第26号に掲載の予定[畝部 2012b]である。本稿執筆に当たってチュラロンコーン大学の Arthid Sheravanichkul 博士には様々な面で助力いただいた。また、論文の着想は学生の頃よりご指導いただいている田辺和子博士の諸研究に大きく負っている。記して謝意を表すものである。

- (1) 菩薩の捨身あるいは施身行については既に多くの詳しい研究がある。代表的なものとして [杉本 1982; 1986] があり、本稿の考察も多くこれに負っている。近くは欧文のまとまった研究書として [Ohnuma 2007] がある。内施/外施という概念に関しては [杉本 1986: 79-80]、[Ohnuma 2007: 173-4] を参照いただきたい。以下に検討するパンニャーサ・ジャータカ中の諸々の物語では「内施」という概念が重要な術語となっているが、本稿では詳しく検討する余裕はないため、便宜上、以下「捨身」の物語として考察をすすめることとする。
- (2) [スキリング 2004: 17] に従って、小部經典のジャータカ (偈文) に対する註釈に見られる本生話群を意味する「古典ジャータカ」という概念を本稿では使用することとする。

ところで、パンニャーサ・ジャータカに含まれる捨身の物語の中には、多くの場合、その目的あるいは動機、つまり、なぜ、何のために捨身を行うのかについてボーディサッタが宣言する場面が描かれている。その一例としては、タイ所伝のパーリ版パンニャーサ・ジャータカ第7話、シリチュッダーマニ王ジャータカが、すでに〔田辺 1981: 78〕によって取り上げられている。この物語において、主人公であるボーディサッタ、シリチュッダーマニ王は、声聞(sāvaka)や独覚(pacceka-buddha)になることではなく、一切知性智(sabbaññutañña)の獲得こそが、自身の捨身の目的である、と述べており、当該論文に指摘されるとおり、捨身の目的として「声聞と独覚とを並べてはっきりと否定」するこの宣言には、「大乘仏教的思想と思われるもの」を見て取ることができ、大変興味深い。〔Unebe 2009: 54〕にも簡単に触れたが、この宣言は、大乘の菩薩は声聞や独覚の境地に堕ちることなく一切知の獲得へ向かうとする、般若経類に見られる定型的な表現と何らかの親近性があるように思われる⁽³⁾。

以下本稿では、この〔田辺 1981〕の先駆的な業績に従い、従来より取り組んできたタイ所伝のパーリ語パンニャーサ・ジャータカ貝葉写本研究⁽⁴⁾の中で明らかになってきた捨身の物語における同様の宣言に着目し、現在までに回収できたいくつかの用例を検討する。続いて、ビルマ所伝のパーリ版等の東南アジアに見られる平行話中の類似の宣言文や、パーリ三蔵やその注釈などにおける関連する記述を精査し、特に「声聞、独覚の栄達(sampatti)を求めのではない」と明言するこのボーディサッタの宣言文の源泉となるものが存在しているかどうかについて、検討していくこととする。

2. パンニャーサ・ジャータカに見られるボーディサッタの宣言

タイ所伝のパンニャーサ・ジャータカの中に見られる上記14話の捨身の物語の中で、日本人にとって最もなじみ深いのは、第19話ダンマソーンダカ・ジャータカであろう。すでに〔Unebe 2009: 51-4〕でも簡単に紹介したとおり、この物語は北伝仏教圏においてよく知られた雪山童子の施身聞偈説話の平行話である。この説話はパーリの三蔵中に類話は含まれていないが、次節でも触れるようにスリランカでは『サハッサヴァットゥ』(Sahassavathuppakarāṇa, 千の物語集)という説話集の第一番目に収録される⁽⁵⁾など、南伝仏教文化圏でもかなりポピュラーな説話であったと思われる。まず始めにこの物語に見られるボーディサッタの宣言を見ておこう。

(3) この問題他、北伝の諸文献との関わりについては、本論文に後続する〔畝部 2012b〕で論じているので参照いただきたい。

(4) 本稿筆者が直接、間接に関わった研究の成果は、〔畝部 2008; 2012a〕、〔田辺 2005〕、〔茨田 2008〕、〔吉元 2001b〕、〔Yoshimoto et al. 2008〕にまとめられている。

(5) このダンマソーンダカ王の物語については、〔松村 2002〕に既に翻訳、研究があり、雪山童子説話との関連も既に指摘されている。

タイ所伝のパンニャーサ・ジャータカ中の物語では、この物語のクライマックスにおいて、主人公であるダンマソーンダカ王が、いわゆる無常偈を聞くために、帝釈天サッカが姿を変えた夜叉に対して身を捧げようと断崖から飛び降りる際、次のように述べている。

「尊者たち、神々の集まりよ、私の言葉を聞いて下さい。私は、自らを法の聴聞のために夜叉に捧げ、そうして、私は人の栄達⁽⁶⁾も望まず、天の栄達も望まず、梵天の栄達も、声聞の栄達 (sāvaka-sampatti) も、独覚 (pacceka-sampatti) の栄達も、四護世神の栄達も、転輪王の栄達 も、六欲天の栄達も、十六梵天の栄達も望みません。そして、ただ自らを捨てて、法を聴聞するために、一切知性智 (sabbhññuta-ñāṇa) に他ならない仏性 (buddhatta-bhāva) を望んでいるのです。自己を輪廻から解脱させるため、命を捨てて法を聴聞するために。」⁽⁷⁾

ここでダンマソーンダカ王は、自身の捨身の目的が法を聞くこと (dhamma-savana) にあり、ひいては一切知性智 (sabbhññuta-ñāṇa)⁽⁸⁾ を獲得して解脱することにあると明言している。そして、これは別言するならば、仏性を得ることこそを目標とするのであって、人間や神々としての幸せを獲得することのみならず、声聞や独覚として自己を完成することをその目標とするのではないと言うのである。

上述のように、タイ所伝のパンニャーサ・ジャータカ中に捨身の物語は14話存在しているが、そのうち同様の宣言は、これまでの研究の及ぶ限りでは、a4. ラタナパジョータ・ジャータカ、a6. ヴィプツラ王ジャータカ、a7. シリチュッダーマニ・ジャータカ、a13. アーディッタ・ジャータカ、a15. マハースラセーナ・ジャータカ、a19. ダンマソーンダカ・ジャータカ、a27. スルーパ・ジャータカ、b8. アリンダマ・ジャータカという8話に存在していることが明らか

(6) ここで便宜的に「栄達」と訳した“sampatti”に関しては、本来であればもう少し詳しい検討が必要であるが、紙幅の都合で扱えなかった。PTS dictionary はこの語に対して最初に“1. success, attainment; happiness, bliss, fortune (opp. vipatti)”という意味を与えている。この語には「達成」という意味があるので、“sāvaka-sampatti”、“pacceka-sampatti”は声聞や独覚として自己を完成させることを意味していると思われるが、一方で同じ文中の“manussasampatti”、“saggasampatti”に相当する語は、漢訳文献において「人天中樂」と訳されているように、むしろ単純に「幸せ」を意味しているであろう。さしあたって「栄光」「達成」両者のニュアンスを含ませて「栄達」という言葉を使っておく。なお、[Unebe 2009: 54]で触れたように、経典冒頭部のいわゆる「六成就」(パーリ語注釈文献では四成就)を注釈するテクニカルな文脈においては、“sāvaka-sampatti”(聞成就)は、経の聞き手たる聴衆がその場に存在していることを意味しており、「我聞」という句を解説する術語として使用されるが、本稿で扱う文脈とは関係していない。

(7) Dhammasoṇḍaka-jātaka (Tanabe D. pu a4-b2; 石野 2008a: 43-44): “bhonto bhonto devasamghā suṇātha me vacanaṃ, ahañ ca attānaṃ yakkhassa datvā dhammasavanatthāya ahañ ca manussasampattiṃ na patthemī, saggasampattiṃ na patthemī, na brahmasampattiṃ, na sāvakasampattiṃ, na paccekabuddhasampattiṃ, na catulokapālasampattiṃ, na cakkavattisampattiṃ, na chakāmāvacarasampattiṃ, na soḷasabrahmasampattiṃ patthemī, api ca kho pana attānaṃ cajiṭvā dhammasavanatthāya sabbhññutañāṇaṃ eva buddhattabhāvaṃ patthayissāmi, attānaṃ saṃsārato mocanattamaṃ jīvitamaṃ pajjāhitvā dhammasavanatthāyā” ti.

(8) 本稿では、[杉本 1980: 11-13]に倣い“sabbhññuta-ñāṇa”に「一切知性智」という訳語を与えておく。紙幅の都合上、ここではこの概念を十分検討することはできないが、これが「南方上座部の菩薩たちの希求する最終目標になっていること」は同論文が指摘するところである。

になってきた。捨身を主題とする物語の半数以上に、ボーディサッタが目指しているのは声聞や独覚ではない、ということが明言されているのである。

これらの物語は、大まかに分けると3種に分類できる。第1のグループは上述のダンマソーンダカ王の物語のように夜叉の姿をした帝釈天サッカに自らを布施して仏法を聞こうとするいわゆる施身聞偈の説話であり、スルーバ王の物語も同様のものである。ただし、このスルーバ王の物語には次グループのように妻子の布施も言及されている。第2のグループは、バラモンの姿をした帝釈天サッカに妻子あるいは自分自身を布施する物語⁽⁹⁾よりなり、ヴィプツラ王、アーディッタ王、アリンダマ王の物語という3話がある。パンニャーサ・ジャータカに含まれる物語の多くは、古典ジャータカの最終話、ヴェッサンタラ・ジャータカ (JA no. 547) の影響下にあるが、特にこれらの物語にはその影響が顕著に見られ、妻子を布施するという全体の筋立てのみならず、ヴェッサンタラ・ジャータカの偈や一節をほぼそのまま組み込んで物語を展開している箇所が散見される。そして第3のグループは、身体の布施の中でも最も極端な形のもをモチーフとするもので、布施を行う王が自らの身体の一部を切り与える凄惨なシーンが描かれるジャータカが3話存在している。類話として古典ジャータカ中においてもシヴィ王の物語がよく知られているが、パンニャーサ・ジャータカ中には、北伝仏教圏で広く見られるチャンドラプラバ王の頭施の物語と同じく、自らの頭を切ってバラモンの姿をしたサッカに布施したというマハスラセーナ王の物語が含まれる。もう1話のシリチュッターマニ王の物語もほぼ同じ展開であるが、こちらは半身をバラモンに布施する話である。残る1話、ラタナパジョータ・ジャータカも身体の一部を布施する物語であるので、便宜上このグループに含めておくが、他の物語が全て王を主人公としているのに対し、これはラタナパジョータという名前の少年が母親の命と引き替えに自らの心臓を夜叉に布施する物語であり、物語の展開は異なっている⁽¹⁰⁾。

それぞれの物語に存在しているボーディサッタの宣言の内容や文体はほぼ共通しているが、

(9) [杉本 1986: 79] に示されるように、妻子の布施は『大智度論』の記述 (T25, no. 1509, p. 283) 等によれば「外施」と分類される。しかしながら、パンニャーサ・ジャータカでは多くの場合、これを内施たる自己の布施と並列に扱っており、外施に分類する考えはなかったように思われる。これはヴェッサンタラ・ジャータカでの扱いに準じているようである。同ジャータカ (JA no. 547: Ja 1, p. 486) において王子は、内施として心臓や眼を施したいと明言しているものの、実際の物語は妻子の布施を中心として展開する。内施、外施の区別はシビ・ジャータカ (JA no. 499) にも言及される (本稿 fn.35 も参照)。なお、この問題については、Hwang Soonil, “Dāna of One’s Own Body and the Dāna Perfection (Pāramitā) in the Vessantara Jātaka”, in [Skilling and McDaniel 2012] を参照のこと。本稿では便宜的に内施、捨身を広い意味で取り、妻子の布施も自己の身体の布施に準ずるものとして扱っておく。

(10) これら8話の全体像については論文末の一覧表を参照いただきたい。なお、もう一話 a.28. マハーパドマ・ジャータカも再生を願って心臓を死んだ母に布施する捨身の物語と言えるが、ボーディサッタの宣言文がビルマ所伝の物語 (Zp 2, p. 332) にしか存在していないため、本稿では考察の対象としていない。母の命を救うことをテーマとする2話に関しては、まとめて別の研究が必要であろう。さしあたって [吉本 2004] を参照いただきたい。

細かい部分では少しずつ異なっている。例としてスルーパ王の宣言を挙げておこう。

「尊者たち、神々の集まりよ。私の〔為す〕息子の喜捨をご覧下さい。この息子の喜捨によって私は、地方の王権を望むではありません。天界の栄達を望むではありません。転輪王の栄達を望むではありません。帝釈天の栄達を望むではありません。梵天の栄達を望むではありません。独覚の栄達を望むではありません。声聞の栄達を望むではありません。未来時に私はブッダになりましょう。〔そのため〕私は夜叉への布施として妻子を施しましょう。」⁽¹¹⁾

ここでは、一切知性智の獲得は述べられず、代わりに「ブッダになること」(成仏、作仏)が目的であると明言されているが、独覚、声聞の両者の栄達とそれが対比される点は、ダンマソーンダカ王の物語と共通している。

これに対して、ラタナパジョータ、アーディッタ王、マハースラセーナ王の物語の三者は、独覚に対する言及のみが存在しており、声聞には触れられていない。ラタナパジョータ・ジャータカにおける宣言は次のようである。

「おお、大夜叉よ。私は転輪王の栄達を望むではありません。帝釈天の栄達を望むではありません。梵天の栄達を望むではありません。あるいは、独覚の栄達を望むではありません。この心臓の布施によって未来時にブッダになってこの一切の衆生を輪廻という存在の海を渡らせ、正法の船を満たして、正しき涅槃を人々に得しむるのです。」⁽¹²⁾

残る5つの物語中に、これとは逆に独覚に言及せず、声聞の栄達を望まないだけ宣言するのは存在していない。この理由については推測の域を出ないが、「声聞の栄達」は、解釈によっては「阿羅漢果の獲得」という非大乘的な仏教徒一般にとっての目的と同等であると理解することができるため、これらの物語を保持していた東南アジアの仏教徒にとって、「声聞の栄達を望むではありません」とするフレーズを削除することに対する心的抵抗は大きくなかったであろうし、むしろ存在しない方が都合がよかったから、とも考えられる。

上述のように古典ジャータカのうちの7話に捨身の物語は存在しているが、そのいずれにも、声聞や独覚を目指すのではなく一切知性智の獲得を目指すのだというこのような宣言は見られ

(11) Surūparāja (Oṭani. maṃ a5–b2; Yoshimoto et al 2004: 167): “bhonto bhonto devasaṃghā passantu me puttapariccāgaṃ. iminā puttapariccāgena ahaṃ na paṭṭhemi padesarajjaṃ, na paṭṭhemi sampattiṃ devalokaṃ, na paṭṭhemi cakkavattisampattiṃ, na paṭṭhemi indasampattiṃ, na paṭṭhemi brahmasampattiṃ, na paṭṭhemi paccekabuddhasampattiṃ, na paṭṭhemi sāvakasampattiṃ, anāgate kāle ahaṃ buddho bhavissāmi, dadāmi puttabhariyaṃ yakkhassa dānaṃ” ti. 吉元 (2001a, 317) の訳も参照されたい。

(12) Ratanapajota (Tanabe D. jaḥ b4–jha a1; 西 2004: 68–69): “bho mahāyakkha ahaṃ cakkavattisampattiṃ indasampattiṃ brahmasampattiṃ na paṭṭhemi, paccekasampattiṃ vā na paṭṭhemi, iminā hadayassa danena anāgate kāle buddho hutvā sabbe ime satte ca saṃsārabhavasāgarā uttaritvā saddhammanāvaṃ pūretvā santaṃ nibbānaṃ pariyaṃ pāpuṇissāmi” ti.

ない⁽¹³⁾ため、これがパンニャーサ・ジャータカという集成に収められた物語の大きな特徴になっていることは明らかであろう。

3. ビルマおよびスリランカの平行話の事例

ビルマ（ミャンマー）所伝のパンニャーサ・ジャータカは、集成全体としてはタイに伝わるものとは共通しない物語も多く含み、文体や語句の面から見ても同じ集成の別バージョンと見るのが適当とは言えないほど異なっているのであるが、上記の宣言文の見られる8つの物語のうち、ダンマソーンダカを除外する7話については、ビルマ所伝のものの中にも含まれている。ただし、残念ながら、これらの異なる集成中の物語がいかなる関係にあるのかについては、今のところ、その先後関係さえも不明である⁽¹⁴⁾。

さて、それら7話のビルマ所伝の物語においても、捨身の目的についてボーディサッタが宣言する文は存在しており、3話（14. スルーパ、23. ラタナバジョータ、26. ヴィプツララージャ）が、声聞と独覚の両者に言及し、1話（17. シリチューダーマニ）が独覚の栄達を望まないことに言及する一方で、残る3話は（1. アーディッタ、4. アリンダマ、28. マハースラセーナ）は、これらの両者に触れない。

マハースラセーナ王・ジャータカには次のような宣言が見られる。

「尊者たち、神々の集まりのみなさま、あなた方は私の〔為す〕最高の布施をご覧下さい。この頭の喜捨によって私は、人間界における転輪王の栄達を望むものではありません。六欲天における栄達や梵界の栄達を望むものではありません。そうではなくて、未来における正等正覚（sammāsambodhi）を望むのです。今の私の頭の布施が、未来における一切世界の利益と幸福の原因としての一切知性智の原因となりますように。」⁽¹⁵⁾

これに対して、タイ所伝の物語における相当文は次のようなものである。

「尊者たち、私の〔為す〕喜捨をご覧の神々の集まりよ、この喜捨によって私は、転輪王の栄達や、六欲天における栄達や、独覚の栄達を望むものではありません。そうではなくて、きっと一切世界

(13) ただし、声聞や独覚の境地との対比が見られないのであって、本稿第4節で検討するように一切知性智の獲得を目指すというボーディサッタの宣言自体はシヴィ王の物語および六牙象の物語等に存在している。

(14) [スキリング 2004: 48] が示すように、「諸パンニャーサ・ジャータカ集成は、オリジナルな単一の著作ではあり得ず、「それぞれの物語がそれぞれの歴史を持っている」。したがって、集成相互の関係を確定することもまた不可能である。

(15) Mahāsūrasenarājātaka (Zp 2, pp. 342–343): “bhonto devaganā sabbe tumhe mama dānuttamaṃ passatha, iminā sīsapariścāgenāhaṃ manussaloke cakkavattirājasampattiṃ na patthemhi, chakāmāvacarasampattiṃ ca brahmalokasampattiṃ ca na patthemhi, api ca kho panāhaṃ (a)nāgate sammāsambodhiṃ patthemhi, idaṃ hi mama sīsadānaṃ anāgate sabbalokahitasukhākāraṇassa sabbaññutañāssa paccayo hotū” ti.

の利益と幸福の原因としての一切知性智の原因となりますように。』⁽¹⁶⁾

タイ所伝の方にのみ存在する「独覚の栄達を望まない」というフレーズを除けば、ビルマ（ミャンマー）所伝のものとの違いは大きくないことは明らかであろう。

同様にアリンダマ・ジャータカのものも見ておこう。ビルマ所伝には次の宣言が見られる。

[アリンダマ王は]「大バラモンよ、私の妃と、馬の結わえられた車とを除いて、残りの全ての財産はあなたのものです」という言葉によって王国を贈与すると、「大バラモンよ、王国よりも百倍、千倍、十万倍も一切知性智 (sabbaññutaññāṇa) こそが、愛しいのです。それゆえ、この王国の布施が、未来における一切知性智という通達智の縁となりますように」と [言って] ……。⁽¹⁷⁾

タイ所伝版では、対応する一節は次のようである。

[おお、バラモンよ、私と王妃と馬と車とを除いて、[私は] 残るすべてをあなたに与えよう」と。
[さらに]「君よ、大バラモンよ、この王国は私によって愛されている。王国もまた愛しいが、一切知性智こそ、百倍、千倍、十万倍も、より愛しいものである」と [大王は言いました]。「まさにこの布施、[それによって]、[私は] 転輪聖王の栄達 (sampatti) も求めません。天界の栄達も求めません。声聞の栄達も求めません。独覚の覚りも求めません。この私の布施が未来時において一切知性智という通達智の縁となりますように。」⁽¹⁸⁾

ここでも、マハースラセーナ王・ジャータカと同じように、下線部を除いた他の言い回しがおおむね対応していることは明らかであろう。妻を布施として与える⁽¹⁹⁾ このアリンダマ・ジャータカの物語は、古典ジャータカ中のヴェッサンタラ・ジャータカに基づくものである。特にタイ所伝の物語は多くの箇所がヴェッサンタラ・ジャータカからの引用を編集するような形で形

(16) Mahāsurasena (Oṭani. tho a1 – tho a3; Yoshimoto et al 2004: 53): “bhonto devasaṃghā, passantā mama paricāgaṃ iminā paricāgena cakkavattisampattiṃ na paṭṭhemi na chakāmāvacarasampattiṃ na brahmasampattiṃ paccekabuddhasampattiṃ na paṭṭhemi api ca kho pana sabbalokahitakarāṇassa sabbaññutaññāṇassa paccayo hotū”

(17) Arindamajātaka (Zp, p. 36): “... mahābrāhmaṇa mama devīṃ ca assayuttarathāṃ ca thapetvā avasesaṃ sabbadhaṇaṃ tuyham eva hotū ti vacanena tassa rajjaṃ niyyādetvā mahābrāhmaṇa rajjato me satagaṇena sahasagaṇena satahasagaṇena sabbaññutaññāṇaṃ eva piyataraṃ tasmā idaṃ rajjadānaṃ anāgate sabbaññutaññāṇapaṭivedhassa paccayo hotū” ti ... [Horner and Jaini 1985: 35] の翻訳も参照。

(18) Arindamajātaka (Rajasiddharam. chyam b4 – chyah a1; Unebe 2012: 88): “āmbho brāhmaṇa mamaṃ ca devīṃ ca assaṃ ca rathāṃ ca thapetvā sabbāṃ avasesaṃ tuyham eva dammi” ti. “bho mahābrāhmaṇa idaṃ rajjaṃ me piyā. api ca rajjaṃ sineho satagaṇena sahasagaṇena satahasagaṇena sabbaññutaññāṇaṃ eva piyataraṃ” ti. “idaṃ eva dānaṃ cakkavattisampattiṃ na paṭṭhemi. saggasampattiṃ na paṭṭhemi, sāvakassa sampattiṃ na paṭṭhemi, paccekabuddhasampattiṃ na paṭṭhemi. idaṃ me dānaṃ anāgate kale sabbaññutaññāṇaṃ pativedhassa paccayo hotu” ti.

(19) 上記引用テキストでは、「私の妃と、馬の結わえられた車とを除いて」、「私と王妃と馬と車とを除いて」となっているが、この物語では最終的に妻をもバラモンに布施することになる。

成されており、下線部の上下の文もヴェッサンタラ・ジャータカ中に平行文が存在する⁽²⁰⁾。つまり、このアリンダマ王の台詞は、ビルマ所伝、タイ所伝ともヴェッサンタラ・ジャータカ中の台詞のほぼ焼き直しであって、タイ所伝版はそこに下線部の声聞、独覚に言及する文を挿入する形で作られているのである。

このアリンダマ・ジャータカと同じく、やはりヴェッサンタラ・ジャータカの焼き直しであるアーディッタ・ジャータカの場合も同じように、ビルマ所伝のものには声聞、独覚に言及する文は存在していない⁽²¹⁾。タイ所伝のものと異なり、ビルマ所伝のパンニャーサ・ジャータカ中の以上の3話においては、声聞、独覚に対する言及は存在していないのである。

一方、ビルマ所伝の集成に含まれていない1話、ダンマソーンダカ・ジャータカは、上述のように『サハッサヴァットゥ』というスリランカに伝わる説話集に、その第一話として収められている。このスリランカ所伝の物語とタイに伝わるパンニャーサ・ジャータカ所収の物語と話の流れは一致しており、スリランカの物語集から直接に物語を引いているというわけではないものの、伝承のいずれかの段階でタイのものがスリランカのもの（あるいは共通のソース）を参照したことは確実であると見られる⁽²²⁾。

ただし、問題となる王の台詞については次のように異なっている。

「私の王位とともに、私の命ある身体を良きダンマのために与えましょう。」と喜びに満ちて、「ダンマを語りたまえ。」と、良きダンマのために命を捨てて宙から落ちつつ、「ダンマを語りたまえ。」と言った。[松村 2002: 29]⁽²³⁾

このスリランカに伝わるものと、本稿の最初の一節で触れたタイ所伝のダンマソーンダカ王の宣言文との間には内容にも文面にも相当に隔たりがある。ここでは、捨身の目的としては、「良きダンマ」(saddhamma)だけが言及され、上で検討したタイ（およびビルマ）所伝の一部の物語に見られたような「正等正覚」や「一切世界の利益と幸福」等は言うに及ばず、多くのタイ所伝の物語中に現れる「一切知性智の獲得」にも触れることはない。そして、人間や神々など、あるいは声聞や独覚としての「栄達」(sampatti)を目的とするのではない、という上記の

(20) ヴェッサンタラ・ジャータカ中の対応する句は次の通り。Vessantarajātaka (Ja 6, p. 570): “ambho brāhmaṇa, Maddito me sataguṇena saḥassaguṇena sataḥassaguṇena sabbaññutañāṇaṃ eva piyatarāṃ, idaṃ me dānaṃ sabbaññutañāṇappaṭivedhassa paccayo hotū”

(21) Adittajātaka (Zp, p. 7): ... ambho brāhmaṇa, ayaṃ Saṅkhadevī mayhaṃ piyatarā yeva hoti. api ca kho Saṅkhadevito sataguṇena saḥassaguṇena sataḥassaguṇena sabbaññutañāṇaṃ eva mayhaṃ piyatarāṃ hoti.

(22) [Unebe 2009: 52], [畝部 2008: 6] に示したように、『サハッサヴァットゥ』においてこのジャータカの物語タイトルを提示するために使われるフレーズ（タイの集成には用いられていない“vatthu”、“atthuppati”という語を含むもの）を、タイ所伝版が不用意にほぼそのまま引き写している箇所があることなどから、このように推定することができる。

(23) Dhammasoṇḍaka (Sah, p. 7): mama rajjena saddhiṃ mayhaṃ saṅgāṃ sarīraṃ saddhammassatthāya dassāmi ti, somanasso hutvā dhammaṃ kathethā ti, saddhammassatthāya jīvitāṃ paricajitvā ākāsato uppativā dhammaṃ kathethā ti āha.

パンニャーサ・ジャータカに特徴的なフレーズはまったく含まれないのである。スリランカの集成を参照したらしき痕跡が存在しているのにも関わらず、タイの物語中のボーディサッタの文言がスリランカのものとは大きく異なっていることは注目に値する。

以上のように、他のパーリ仏教圏の説話集に含まれる平行話との比較によっても、「声聞や独覚としての栄達を目指すのではない」という宣言が、パンニャーサ・ジャータカ所収の物語、特にタイ所伝のもの大きな特徴になっていることを確認することができるのである⁽²⁴⁾。

4. パーリ三蔵および注釈、論書等の事例

次に、直接パンニャーサ・ジャータカ所収の物語とは関係しない、パーリ語諸文献中の関連する記述を検討してみたい。古典ジャータカに含まれる7話の捨身の物語のうち、その目的をボーディサッタが宣言するものは3話⁽²⁵⁾あり、以下に検討するように、これらがパンニャーサ・ジャータカ中のボーディサッタの宣言文のモデルとなっていること自体は間違いないと思われる。ただし、それらには、声聞や独覚に対する言及は存在していない。例としてシヴィ・ジャータカ (JA no. 499) およびチャッダンタ・ジャータカ (JA no. 514) を挙げておこう。

シヴィ・ジャータカはよく知られているように、主人公シヴィ王がバラモンの姿を取ったサッカに自分の目を布施として与える物語である。シヴィ王は自らの布施について、次のように語っている。

「わたしはそれを名声のために与えるのではない。私は息子や財宝や王国を望まない。これはむかしの賢者達の行った正しい道である。だからこそ、私の心は布施を楽しむ。」[上村 1988: 116]⁽²⁶⁾
 「一切を知る智慧の眼は、私のこの眼よりも、百倍も千倍も好ましいのだ。私の動機はそのためである。」[上村 1988: 117]⁽²⁷⁾

最初の文は偈文（すなわちパーリ三蔵小部經典中のジャータカ本文）であるが、この文は文体

(24) 論文末の一覧表からも分かるように、声聞の境地、独覚の悟りなどを目指すのではないという趣旨の記述はビルマ所伝の5話にも存在している以上、これを必ずしもタイ所伝の集成だけの特徴であると言うことはできない。ただし、本稿で中心的に扱っている、法の聴聞、あるいは、布施波羅蜜の完成を通して一切知を獲得してブツダになることを願う捨身物語に限るならば、タイ所伝のものは7話すべてにおいてそれらへの言及が見られるのに対し、ビルマのものは3話だけに言及されており、これは有意な差と認められるであろう。

(25) *Sīlavanāgarājāta* (JA no. 72): Ja 1, p. 321; *Sivijātaka* (JA no. 499): Ja 4, p. 406–7; *Chaddantajātaka* (JA no. 514): Ja 5, p. 52–3. それぞれの翻訳として、[田辺 1987]、[上村 1988]、[長崎 1988] がある。

(26) *Sivijātaka* (Ja 4, p. 406): “na vāham etaṃ yasaṣā daḍāmi, na puttam icche na dhanam na raṭṭham. satañ ca dhammo carito purāṇo, icceva dāne ramate mano maman” ti. なお、この偈は *Cariyāpiṭaka* 8.18でもあるが、註 (Cp-a, p. 68) において、ダンマパーラはこの後検討するような形の声聞、独覚に対する言及を行っていない。

(27) Ja 4, p. 407: “ehi brāhmaṇā” ti brāhmaṇam pakkositvā “mama ito akkhito sataguṇena saḥassaguṇena sabbaññutañāṇakkhim eva piyaṃ, tassa me idaṃ paccayo hotī”. この文は古典ジャータカ中には何度も繰り返される定型表現であり、捨身を主題とする物語以外でも使用されている。

の面ではパンニヤーサ・ジャータカには直接的に引き継がれなかったようであり、内容的にもそれほど関連していない。他方、二番目の文はジャータカ註(物語部分)に現れるものであり、パンニヤーサ・ジャータカにおいても類似したフレーズが定型的に用いられるようになる。

同様の表現は六本の牙を持つ象が自らの牙を獵師に与える物語、チャッダンタ・ジャータカでも使われており、パンニヤーサ・ジャータカの定型的表現の直接的なモデルとなっていると考えられるのは、主人公の六牙象チャッダンタの次のような台詞である。

「友よ、獵師よ、これらの牙をそなたに私が与えるのは、それを嫌うからでもなく、帝釈・魔王・梵天の位を求めて与えるのでもないのだよ。そうではなく、全てを知りつくす智という牙は、これらの牙の百倍も千倍も私には愛すべきものなのだ。全てを知りつくす智に達するために、私にこの善行がその原因となりますように。」[長崎 1988: 231]⁽²⁸⁾

ここでボーディサッタは自らの布施について「帝釈・魔王・梵天の位」を求めるものではないと述べており、「栄達」(sampatti)という言葉が使われているわけではない⁽²⁹⁾のだが、これが、一見して先に見てきたパンニヤーサ・ジャータカにおける菩薩の宣言文と共通していることは明らかであろう。

以上の二つの物語は、どちらも身体の一部を布施する物語であり、そのような身体の布施の目的は一切知性智の獲得であると明言されている。この点はパンニヤーサ・ジャータカの諸話と共通している一方で、上述のように「声聞と独覚の栄達を望むのではない」という点にこれらの物語が触れることはない。古典ジャータカ中の宣言文では、一切知性智の獲得と対比され否定されているのは、名声や神々の位を獲得することであり、この点でのパンニヤーサ・ジャータカ中の物語との関連は見られないのである。

この「声聞と独覚」への言及に関し、同じ古典ジャータカ中で検討しておくべきなのは、シリ・ジャータカ(JA no. 284)の次の偈文(この偈文自体は *Khuddaka-pāṭha* 8.10-16としても見られる)であろう。

ここに神と人間のあらゆる欲求をかなえる宝蔵がある。何をそれに望もうと、あらゆるものをそ

(28) Chaddantajāṭaka (Ja 5, pp. 52-53): “samma luddaputta ahaṃ ime dante tuyhaṃ dadamāno neva mayhaṃ appiyā ti dammi, na Sakkatta-Māratta-Brahmādiṃ patthento, imehi pana me dantehi sataṣahassaguṇena sabbaññūtañānadantā va piyatarā, sabbaññūtañānappiṭvedhāya me idaṃ puññaṃ paccayo hotū”

(29) ただし、Ja 5, p. 53 の fn. 1 によればビルマ版では、sakka-sampatti のように、sampatti という語が用いられていることが分かる。なお同様のフレーズは仏伝にも組み込まれており、ジャータカの序分である「ニダーナカター」(Ja 1, p. 48)においても、ボーディサッタがトウシタ天から人間界に再生するにあたり、ボーディサッタが過去世において十波羅蜜を全うしたのはこの文にも見られる「帝釈・魔王・梵天」という3つに加え、転輪聖王の栄達(sampatti)を求めてではないと、神々が告げている。これはタイのポピュラーな仏伝『パタマサンボーディ』(Pathama pp. 4-5)にもみられる。これらは、しかし、宣言文ではなく、また声聞、独覚への言及もない。

れによって入手する。(略)

地方の支配権・主権・転輸の喜びも、天界における天界の王権も、あらゆるものをそれによって入手する。

人間の成功も、天界における喜びも、また涅槃の完成も、あらゆるものをそれによって入手する。(略)

さわりない理解表現力、さとり、弟子（声聞）の完成、一人でさとる人〔縁覚、独覚〕のさとり、仏の境地、あらゆるものをそれによって入手する。

善業をそなえることは、このように、大神通力をとまなう。それゆえに思慮あるものも、学識あるものも、善業を積むことを称賛する。〔前田 1982: 298-299〕⁽³⁰⁾

このシリ・ジャータカは、ある象使いにどのようにして幸運 (siri) がめぐってきたかについて語る物語であるが、物語の終わりの部分に、このような幸運と善業の功德とが似ており、そして幸運も善業こそを原因とするということについて、ブッダ釈尊が解説する場面が見られる。上掲はその解説の一部である。

この翻訳からも明らかのように、この偈文では、善業によって得られる結果として、人間や神々としての幸せ等のみならず、声聞としての完成 (sāvaka-pāramī) および独覚の悟り (paccekabodhi) までが、解脱 (vimokkhā) や仏の境地 (buddhabhūmi) とまったく並列に列挙されており、先に検討したパンニャーサ・ジャータカ中の記述とは大きく異なっている。ここでは、他の様々な善業の結果と対比させ、仏の境地 (ブッダになること) だけに特別焦点を当てるといったことはないのである。

次に、正典に準ずるものとされるパーリの論書⁽³¹⁾ から、ブッダゴーサ (5世紀) の『清浄道論』(Visuddhimagga) を引用しておこう。そこにおいて彼は、怒りが人間にもたらす結果について、次のように述べている。

彼に対して怒るあなたは、何を為すであろう？ (略) あなたが為す行為、あなたは其の相続人となるのである。あなたのこの [怒りという] 行為は、正等正覚も独覚の悟りも声聞の境地も、梵天位も帝釈位も転輸聖王、国王などの栄達もまた別の栄達も成就させることはない。かえってこの行為は実に [ブッダの] 教えから離れさせ、残飯を食する [畜生] の状態へ、また、地獄など

(30) Sirijātaka (Ja 2, p. 414; Khp, p. 7): esa devamanussānaṃ, sabbakāmadado nidhi / yaṃ yad evābhipatthenti, sabbam etena labbhati //10// padesarajjāṃ issariyaṃ, cakkavattisukhaṃ piyaṃ / devarajjāṃ pi dibbesu, sabbam etena labbhati //12// mānūsikā ca sampatti, devaloke ca yā rati / yā ca nibbānasampatti, sabbam etena labbhati //13// paṭisambhidā vimokkhā ca, yā ca sāvaka-pāramī / paccekabodhi buddhabhūmi, sabbam etena labbhati //15// evaṃ mahatthikā eṣā, yad idaṃ puññasampadā / tasmā dhīrā pasamsanti, paṇḍitā katapuññaṭaṃ //16//

(31) ただし、[森 1984: 6] が示すように、『清浄道論』は論書というより通例アッタカター (註釈) 文献として扱われる。

の特別な苦へとあなたを陥れるものなのである。⁽³²⁾

興味深いことに、ここでブッダゴーサは、他の「栄達」(sampatti) とともに「独覚の悟り (pacceka-bodhi)」や「声聞の境地」(sāvaka-bhūmi) に言及しており、使われている語彙はかなりパンニャーサ・ジャータカにみられるものと重なっている。しかし彼の意図は先に見たパンニャーサ・ジャータカの物語のものとは、やはりまったく異なったものである。ここでは、それらは怒りによって達成することが不可能となる境地として他と並んで列挙されているに過ぎないのであって、ここでも、先のジャータカと同じく、これらと対比するなどして「正等正覚を得られない」ということに、特段焦点が当てられることはないのである。

5. ダンマパーラの『チャリヤーピタカ註』

概して、パーリ文献において「独覚の悟り」や「声聞の境地」といった概念が言及されることは少なく、それらが一切知性智の獲得と対比されることはさらに少ないように思われる。実を言えば、そのような例として、これまでのところ [Unebe 2009: 54] で既に言及したダンマパーラによる『チャリヤーピタカ註』(Cariyāpiṭaka-aṭṭhakathā) の一例を見出すことができたに過ぎない。

『チャリヤーピタカ』第一話では、バラモンの姿をしたサッカに対し、飽くことなく布施を施すアキッティ賢者の物語が語られる。物語中、アキッティ賢者は、彼の布施の目的・動機について次のように述べる。⁽³³⁾

「私は、この施しによって供養や恭敬や名声を得たいのではなく、転輪王やサッカや梵天になりたいのでもなく、声聞の覚り (sāvakabodhi) や辟支 [仏の] 覚り (paccekabodhi) を求めているのでもない。そうではなくて、この施は、私が一切知性智 (sabbāññutañña) に [到達する] 助縁 (paccaya) となりますように」 [勝本 2007: 31]

“sampatti” の代わりに “bodhi” という語が使われてはいるものの、このアキッティ賢者の宣言はパンニャーサ・ジャータカにおけるダンマソーンダカ王や他の物語でみられたものとほぼ同じものである。さて、それでは、このアキッティ賢者の物語が、タイのパンニャーサ・ジャー

(32) *Visuddhimagga* 9.1 (Vism, p. 301): tvam tassa kuddho kiṃ karissasi? ... yaṃ kammaṃ karissasi, tassa dāyādo bhavissasi, idaṅ c’ assa kammaṃ neva sammāsambodhiṃ, na paccekabodhiṃ, na sāvakabhūmiṃ, na brahmattasakkattacakkavattipadesarājādisampattīnaṃ aññataraṃ sampattīṃ sādhetuṃ samatthaṃ, atha kho sāsanaato cāvetvā vighāsādādhāvassa ceva nerayikādidukkhavisesānaṃ c’ assa saṃvattanikaṃ idaṃ kammaṃ.

(33) *Cariyāpiṭaka-aṭṭhakathā* (Cp-a, p. 23): “tena dānena na lābhasakkārasilokaṃ na cakkavattisampattīṃ na sakkasampattīṃ na brahmasampattīṃ na sāvakabodhiṃ na paccekabodhiṃ patthemi, api ca idaṃ me dānaṃ sabbāññutaññassa paccayo hotū” ti

タカにおけるボーディサッタの宣言の源泉ないしモデルであったと直ちに結論づけることはできるであろうか。

ダンマパーラも明示している⁽³⁴⁾ように、このアキッティ賢者の物語の主題は、疑いなく「布施の完成」(dāna-pāramī)である。この物語において、資産家であったアキッティは全財産を喜捨した後、さらに修行者として食べ物を布施し続ける。しかしながら、この物語において、彼は自分の身体(あるいは妻子)を布施したり、あるいは切り与えたりすることはないのであって、これは当該の宣言を含むパンニャーサ・ジャータカの全ての物語が主題とする内施(ajjhattika-dāna)、すなわち捨身に関する物語ではないのである⁽³⁵⁾。『チャリヤーピタカ』には、先に見たようにパンニャーサ・ジャータカに含まれる宣言文のソースであると推定されるシヴィ王の物語や布施の物語の典型であるヴェッサンタラ王子の物語も含まれている。典型的な捨身の物語として知られるウサギ本生も存在している。それにも関わらず、それらの物語において、一切知性智の獲得が、声聞や独覚の栄達(sampatti)(あるいはそれらの境地や悟り)と対比させて説かれることはない⁽³⁶⁾。パンニャーサ・ジャータカの場合、管見の範囲では捨身の物語と「声聞や独覚の栄達は求めません」という宣言文の間の関連性はかなりはっきりしており⁽³⁷⁾、この点、ダンマパーラの『チャリヤーピタカ註』はそれとは大きく異なっているのである。

実はダンマパーラの注釈ではなく、『チャリヤーピタカ』本文(第10偈)では、布施の目的について「彼に布施を与えたのは名声や利得を求めるためではありません。一切知性を求めて、私はこれらの行為を行ったのです」⁽³⁸⁾と記述されるのみであり、前節で見た古典ジャータカの三話と同じく、声聞や独覚に対する言及は存在していない。また、同じアキッティ賢者の物語は、アキッティ・ジャータカ(JA no. 480)として古典ジャータカにも収められているのだが、そこでも同じように、布施の動機・目的に関しては、「これが私の布施です。一切知性智の縁となりますように」⁽³⁹⁾、および「わたしは諸々の栄達(sampatti)を求めているものではありません。一切知性を得ようとして苦行をしているのです。」⁽⁴⁰⁾と記されるのみである。これらのことから、元来この物語は、布施の目的としての一切知性智の獲得を声聞や独覚の覚りと対比す

(34) *Cariyāpiṭaka-aṭṭhakathā* (Cp-a, p. 109): dasavidhacariyāsaṅgahassa visesato dānapāramīvibhāvanassa paṭhamavaggaṃ atthavaṇṇanā nīṭṭhitā.

(35) 同じ『チャリヤーピタカ』中にシヴィ王の物語も含まれているが、こちらは内施/外施の区別についての言及を含んでおり、そこではシヴィ王の行うような身体の一部または全部の布施、および奴隷になることが内施であると明言される。[勝本 2007: 76-77] の翻訳を参照されたい。

(36) [勝本 2007: 76-125] の翻訳参照。

(37) ただし、様々な形で存在するパンニャーサ・ジャータカに含まれる全ての物語について網羅的に調べたわけではないので、同様の宣言が内施あるいは捨身とは直接関係しない物語に存在する可能性はもちろん否定できない。この点は将来的な検証が必要である。

(38) *Cariyāpiṭaka* v.10 (Cp-a, p. 24): Na tassa dānaṃ dadamāno yasaṃ lābhaṃ ca paṭthayim / sabbaññutaṃ paṭthayāno tāni kammāni ācarin //

(39) *Akittijātaka* (Ja 4, p. 239): “idaṃ me dānaṃ sabbaññutañāṇassa paccayo hotū” ti...

(40) *Akittijātaka* (Ja 4, p. 239): “nāhaṃ eṭā sampattiyo paṭthemī, sabbaññutaṃ pana paṭthento tapokammaṃ karomī” ti. ストーリー展開など物語全体については、[岡田・岡田 1989: 233] の翻訳を参照のこと。

る形で説くものではなかったと思われる。

以上のような2つの点から見て、『チャリヤーピタカ註』のアクティ賢者の物語に見られるボーディサッタの宣言文が、パンニヤーサ・ジャータカの捨身の物語に見られる宣言文の直接的な源泉であるとは考えにくいであろう。

さて、ここで「独覚の悟り」や「声聞の完成」に対する直接の言及がないものにまで、そして、ジャータカでないものにまで考察範囲を拡げるならば、パーリ三蔵（および註釈）の中には、ブッダ釈尊がその前生において、自分一人のための悟りを目指すのではなく、この世界の人々を救おうと成仏（作仏）を決意する、という場面が、『ブッダヴァンサ』中の過去仏ディーパンカラ（燃灯仏）の物語に見られる⁽⁴¹⁾。よく知られた苦行者スメーダの授記のエピソードである。これに関しては既に〔勝本 2002〕に詳しい研究があるので、そこから問題になる偈を引用しておこう。スメーダは、ディーパンカラ仏とその弟子たちのために泥道に伏し、自分の髪を敷いて道としようとするのであるが、その時次のように決意（*abhināra*）する。

「大地に伏しているとき、私はこう思った。

私が望むなら、今私の煩惱を焼き尽くせるだろう。

〔だが〕ここで人知れぬ姿で法を覚って何になろう。

私は一切知性を得て、人天界で仏陀となろう。

私が一人で〔彼岸に〕渡ったとして力を誇示して何になろう。

私は一切知を得て、人天界の衆生を〔彼岸に〕渡そう。（略）〔勝本 2002: 127-8〕⁽⁴²⁾

ここで「煩惱を焼き尽くす」、「法を覚る」と表現されて、「一切知性を得て、仏陀となる」とことと対比されているのは、文脈上からも、また、これらの偈を引く古典ジャータカの序分である「ニダーナカター」の散文部分の記述⁽⁴³⁾からも、ディーパンカラ仏の弟子となって、仏道修行に入って「一人で」（*ekena*）悟りを目指すことであると思われる。つまり、明確に意識されていたかどうかは別にして、声聞、独覚になることよりもブッダになることの方が優れている

(41) 『ブッダヴァンサ』の当該箇所についてご教授下さった Peter Harvey 教授に記して謝意を示します。

(42) *Buddhavaṃsa* (Bv, p. 12): *pathaviyaṃ nipaṇṇassa, evaṃ me āsi cetaso / icchamāno ahaṃ ajja, kilēse jhāpaye mamaṃ //53// kiṃ me aññāta-vesena, dhammaṃ sacchikaten' idha / sabbaññutaṃ pāpuṇitvā, buddho hessaṃ sadevake //54// kiṃ me ekena tiṇṇena, purisena thāmadassinā / sabbaññutaṃ pāpuṇitvā, santāressaṃ sadevake //55//...*

(43) 「ニダーナカター」と『ブッダヴァンサ』の関係についても〔勝本 2002〕を参照されたい。「ニダーナカター」では、当該の偈を引用するに先立ち、散文で「私はもし望むならば、全ての煩惱を焼き尽くして、僧団の新参者 (*samgha-navaka*) となり、ランマの都に入ることができよう……」〔藤田 1984:14〕と言ひ換えている。

るといふ考えは、この時点ですでに含意されている⁽⁴⁴⁾ものと見ることもできる。

興味深いことに、ダンマパーラは『チャリヤーピタカ註』の序分に当たる部分において、このスメダの授記のエピソードを説くにあたり、この決意を散文で記すのであるが、そこでは次のように、これを次のようにはっきりと「声聞 (sāvaka) となること」と言い換えている。

「もし私が望むならば、この世尊の弟子 (sāvaka 声聞) になって、今日煩惱を焼き尽くせるだろう。
[しかし] 私ひとりだけで、輪廻の大暴流から度脱してなにならう。私もこのような正等覚者
となって、神々をとまなうこの世間 [の人々] を輪廻の大海から渡らせよう」[勝本 2007: 19]⁽⁴⁵⁾

この「決意」はブッダの前生における授記に関連するものであり、未来にブッダとなるスメダの決意としては、もちろん内容的に相応しく、ダンマパーラの言い換えもごく自然ではあると思われる。しかしながら、パーリ正典の一つたる『ブッダヴァンサ』の偈文自体にそのように読む余地は存在しているにせよ、他の人を輪廻からの解脱へと導くブッダになることの方が声聞となることよりも優れていると明言するこの文章は、パーリ三蔵およびその註釈文献のなかでは、やはりダンマパーラの『チャリヤーピタカ註』に特徴的なものと言っていいであろう。さらに、この「決意」は、授記物語の中に見られるものであり、同じブッダの前生の物語とはいえ、捨身を説くジャータカ物語中に説かれているわけではなく、また、布施の文脈でもないことから、本論文で検討しているフレーズとの直接的な関連があるとはいえないであろう。

ダンマパーラは、声聞や独覚の悟りと対比させて、一切知性を得てブッダとなることをめざすボーディサッタ (前世におけるブッダ) のあり方の方が優れている、ということを明示的に示そうという意図をもっていた⁽⁴⁶⁾と理解すべきであり、『チャリヤーピタカ』中の最初の本生話であるアキッティ・ジャータカ、および、最初の過去仏の物語であるディーパンカラによる授記の物語においてそれを実行したものと思われる。

パンニャーサ・ジャータカに特徴的なボーディサッタの宣言文の直接的な源泉となるもの

(44) パーリ語文献に見られる (特に大乘的な意味での) 菩薩思想に関しては、詳細な検討が必要であり、本稿で扱うことは適わないが、さしあたって [勝本 2002; 2006] の他、[Samuels 1997] を参照されたい。[勝本 2002: 12] は『ブッダヴァンサ』の当該の箇所を評して「ここで、菩薩が一人解脱して涅槃に入ってしまうより、この世でブッダになろうと決心し、衆生救済することを誓っていることは注目すべきであろう。言い換えれば無漏の聖者 (阿羅漢) となる道や、一人で覚る辟支仏の道を選ばなかったということである」と述べている。さらに [勝本 2011, 186-8] では、同じ箇所を評して「二乗ではなく菩薩乗に入ることを暗示する」とし、続いて波羅蜜説に関しては、スメダの物語を『ブッダヴァンサ』に挿入した段階で取り込まれた大乘思想として論じている。

(45) *Cariyāpiṭaka-aṭṭhakathā* (Cp-a, p. 14): ‘sacāhaṃ icchissāmi, imassa bhagavato sāvako hutvā ajj’ eva kilēsa jhāpessāmi. kiṃ mayhaṃ ekaken’ eva saṃsāramahoghato nittharaṇena? yaṃ nūnāhaṃ pi evarūpo sammāsambuddho hutvā sadevakaṃ lokāṃ saṃsāramahaṇṇavato tāreyyan’ ti.

(46) [勝本 2003: 174-5; 184-6] が明らかにしたように、ダンマパーラはしばしば声聞、独覚と菩薩とを対比させてその注釈を展開しており、大乘の瑜伽行派の『瑜伽師地論』菩薩地と共通した思想さえ見られる。また、本稿で問題する箇所を含むテキストも [勝本 2002: 135] はパーリ注釈書の中の「大乘的な要素のある部分」として扱っている。

は、パーリ三蔵には見あたらないようであり、類似した宣言文を含むダンマパーラ（6世紀頃⁽⁴⁷⁾）による『チャリヤーピタカ註』も、パンニャーサ・ジャータカがそれよりはるか後の15～6世紀の成立とも言われている以上⁽⁴⁸⁾、それが参照された可能性は否定することはできないものの、直接的なソースと見ることができるかは疑わしい。パンニャーサ・ジャータカに現れる問題の宣言文は、形式こそ『チャリヤーピタカ註』と同等の形ではあるが、それは捨身の物語を特徴付けるものなのであって、いわゆる「大乘的」と見なしうるような思想をはっきりと保持し、それを明示しようとしているダンマパーラの意図⁽⁴⁹⁾と類似したものがそこにあったかどうかは、必ずしも明確ではないのである。

6. むすび

以上、パンニャーサ・ジャータカ中の捨身の物語に存在するボーディサッタの宣言文を検討し、さらには東南アジアの他の国に見られる平行話および他の種類の関連するパーリ語諸文献について検討した。

その結果、捨身を行うに際し、一切知性智の獲得を様々な栄達に対比させてその捨身の目的として宣言する文言は、確かにパーリ三蔵中の古典ジャータカにも存在し、具体的にはシヴィ王の物語や六牙象王の物語などが、パンニャーサ・ジャータカに見られるボーディサッタの宣言文のモデルとなっているであろうことが確認された。

一方で、これらの物語において一切知の獲得と対比されるものの中には、声聞の境地や独覚の悟りは含まれておらず、この点、パンニャーサ・ジャータカ所収の捨身の物語に特徴的に見られる声聞、独覚の栄達（sampatti）に言及する宣言文の直接のソースを見いだすことはできなかった。パーリ三蔵やその注釈などの文献中、声聞、独覚に言及する唯一の例外は、『チャ

(47) [森 1984: 530-9] に示されるようにダンマパーラの年代については諸説ある。パーリの注釈者たちについては [勝本 2002: 122-3] も参照。

(48) 成立年代に関する諸説については [スキリング 2004: 46-48] 参照。ただし、年代に関して確実なことは何もわかっていない。また、集成の成立年代と個別の物語の成立年代とが一致するわけでもないので、個々の伝承が東南アジアのパーリ語文化圏にどのように伝わってきたかについては、現在のところ残念ながら何らの仮説も持ち合わせていない。

(49) 注(46)に示した [勝本 2006] の研究によって、『チャリヤーピタカ註』の最後の「雑論」という章に『瑜伽師地論』菩薩地の内容に共通する要素が見られることははっきりしており、それらを体系的に提示しようとしていることは明白である。ただし、本稿で扱った文言はいずれも、ブツダ釈尊の前生としてのボーディサッタの所行に関して述べられたものであり、その他多くの「菩薩たち」を想定して菩薩道を宣揚する「大乘」の教えを説こうとしているわけでは必ずしもないことから、ダンマパーラは注意深く則を越えないようにしているとも取ることができる。つまり、ブツダになるべき者に例外的に想定されているのが菩薩道という優れた道である、と捉えるならば、『ブツダヴァンサ』というパーリ正典に説かれている内容と大きく変わることはないし、他のパーリ正典の内容とも矛盾なく接続可能であろう。[勝本 2002; 2011] に示されるように『ブツダヴァンサ』自身にさえ大乘の影響と思しき記述を見て取ることはできるが、だからといって、もちろん『ブツダヴァンサ』が積極的に大乘説を説いているというわけではないのである。

リヤーピタカ註』冒頭のアキッティ王の物語に見られるが、この物語は捨身を主題とするとはいえないものであって、パンニヤーサ・ジャータカの中の物語がこの『チャリヤーピタカ註』を直接承けているとは見なしがたい。『チャリヤーピタカ註』における宣言文は、むしろ著者ダンマパーラの保持していた大乘の論書とも共通する要素を含んだ仏教教義に依存するものであると思われるからである。

パンニヤーサ・ジャータカにおけるボーディサッタの宣言文は、捨身の目的として声聞と独覚とを並べてはっきりと否定しており、そこには〔田辺 1981〕に指摘されていた通り、使用される語句の上には確かに「大乘仏教的な思想と思われるもの」を見て取ることができる。しかしながら、これらの物語がブッダ積尊の前生について語るジャータカである以上、主人公のボーディサッタは最終的には当然ながら声聞としての自己完成や独覚の悟りではなく、一切知を得て成仏し、他の人々の利益のために法を説くことが物語上あらかじめ定まっているのであり、必ずしもここに大乘的な菩薩思想を想定しなくても、前節に検討した『ブッダヴァンサ』におけるスメダの「決意」の延長上にこの教説は成立しうるのである。つまり、問題の宣言文は、形式的には古典ジャータカ中の捨身の本生物語に、内容的には『ブッダヴァンサ』などに見られる授記の物語に、その淵源が見られるということが出来る。たとえ、物語のクライマックスとも言える箇所、大乘的な語彙をもって語られる宣言文が存在しているといっても、大乘思想との関連について明言することはできないのである。

この点、『サハッサヴァットゥ』所収のスリランカ版のダンマソーンダカ王の物語を訳出、検討した〔松村 2002: 37-38〕が、その物語について「大乘仏教的要素の残存ないし影響とする見方は当を得ているとは言えない」とし、また「この捨身聞偈説話の起源はかなり古いものであって、それが大乘では大乘的な味付けのもとに語られ、スリランカ上座部では、利他の観念のない物語として伝えられたと考えられる」と結論づけていることが注目される。タイでも事情は同じであり、非常に古い起源を持つ説話がタイの「味付けのもとに」伝承されてきたということには間違いはない。

ただし、本稿第3節で見たスリランカ版のダンマソーンダカ王の物語が利他の思想を説いていなかったのとは異なり、タイに伝わるパンニヤーサ・ジャータカ所収の同物語には、物語の終わりにサッカが王を教誡して「全ての衆生の利益のために、諸々の衆生の利益の原因となるように、諸々の福德をなしなさい。また同じく、いかなる時も王国を守りなさい」⁽⁵⁰⁾と述べる場面が存在しており、ボーディサッタの宣言文中にはないものの、利他の思想は明確に見られる。また、第2節で見たマハースラセーナ・ジャータカやラタナパジョータ・ジャータカ、〔畝部 2012b: 148-149〕で取り上げるシリチュッダーマニ・ジャータカのように宣言文自体に利他思想が明示されるものもある。つまり、タイの捨身物語の場合、スリランカのケースに対して

(50) Dhammasoṇḍaka-jātaka (Tanabe D. pū b2-b3; 石野 2008a: 45): sabbasattahitathāya sattānaṃ hitakāraṇe / yathā puññāni kayrāhi rajjāṃ pāletu sabbadā //

[松村 2002: 37-38] が想定しているような「利他思想を含まない」という理由で、「大乘仏教的要素の残存ないし影響とする見方」を否定することはできないのである。

それでは、逆に「利他思想を含む」という理由で、タイの捨身物語をかつて当地に存在していた大乘仏教の痕跡であると直ちに結論づけることができるかといえば、問題はやはりそれほど単純ではないであろう。前節に見たように、諸々のパーリ語文献においては、三乗の位置づけにせよ、利他思想にせよ、ブッダ釈尊の前生としてのボーディサッタの所行に限って述べられているのであって、その他の複数の「菩薩たち」を想定し、大乘の菩薩たることをひろく勧めるものでない以上、基本的にはパーリ正典の一つたる『ブッダヴァンサ』の枠組みから外れるものではない。先に検討した『ブッダヴァンサ』の偈文に「一切知を得て、人天界の衆生を彼岸に渡そう」と利他思想が説かれていたからと言って、スメータの授記物語自体はもちろん大乘仏教のものではないし、この部分のみを取り上げて、これを単純に大乘仏教的要素の影響と片付けることができないのと同じである。

ダンマソーンダカ王の物語のように古い起源を持つ捨身の物語は、タイにおける伝承の中でさえ一様の形を保っていたということはないであろう。そもそもタイは、固定されたパーリ三蔵の姿から想像されるような一貫したテーラヴァーダ仏教の国では決してなく、また、蔵外の説話文献がどのような形で伝承されてきたのかについては、パーリ三蔵よりもさらにその事情は不明である。声聞、独覚を否定し、一切知を得て成仏することを目標として明確に宣言するパンニャーサ・ジャータカ所収の捨身物語が、歴史のどこかの時点で何らかの形の大乗仏教的な思想と関係していた蓋然性は高いし、逆にそれがまたパーリ三蔵的、テーラヴァーダ仏教的な枠組みで捉え直されることも起こったであろう。しかし、その伝承の歴史を再現することは容易なことではない⁽⁵¹⁾。

ただし、そうは言っても、本稿で取り上げたボーディサッタの宣言に見られるような形の三乗の位置づけは、パーリ語文献においてはわずかに『チャリヤーピタカ註』の中の、しかも捨身の物語ではない一話のジャータカと授記の物語においてのみ顕在化しているに過ぎないことから、やはりパーリ語の諸文献だけでなく、それとは別の系統、つまり、北伝の諸ジャータカ、アヴァダーナ文献や他のさらに大乘的な論書などとの関連を確かめておく必要がある。実は、北伝の方には、捨身のジャータカ物語であって、かつ本稿で問題としてきた形の宣言文を含むものが、少なくとも一話存在しているのである。このカーンチャナサーラ王の前生物語をはじめとする北伝諸文献との関連については稿を改め、[畝部 2012b] で論じることとしたい。

(51) さらに視野を広げるならば、パンニャーサ・ジャータカに現れる菩薩の概念については、もとよりタイの仏教への大乘の影響の有無について云々して事足りるものではなく、[平川 1989: 262-277] によって整理されている授記物語の菩薩の概念と大乘の菩薩概念との関係を踏まえ、その展開の中にどのように位置づけられるかを検討する必要があるであろうし、加えて、そのような区分をいったん手放し両者を一つの菩薩として捉える [下田 2004: 4-7] が提示するような新たなパラダイムからの菩薩論にいかん資するかについても考察すべきところであろうが、現在の筆者にはその準備はない。

附：パンニャーサ・ジャータカ中の捨身説話に見られるボーディサッタの捨身の目的・動機

	説話番号と 平行話	声聞	独覚	目的／動機	布施する もの	布施する 相手	関連文献
Dharmasonḍaka	a19 Sah 1: 7	○ —	○ —	聴聞 →一切知の獲得	自身	夜叉 (サッカ)	雪山童子 (<i>Mahāparinivāna-sūtra</i>)
Surūpa	a27 Zp 14: 182	○ ○	○ ○	聴聞 →一切知の獲得	妻子およ び自身	夜叉 (サッカ)	Surūpa (<i>Avadānaśataka.</i>)
Vipullarāja	a6 Zp 26: 312	○ ○	○ ○	布施波羅蜜 →一切知の獲得	妻子	バラモン (サッカ)	Vessantara
Āditta	a13 Zp 1: 7	— —	○ —	布施波羅蜜 →一切知の獲得	妻	バラモン (サッカ)	Vessantara
Arindama	b8 Zp 4: 36	○ —	○ —	布施波羅蜜 →一切知の獲得	妻および 自身	バラモン (サッカ)	Vessantara
Siricuddhāmaṇi	a7 Zp 17: 203	○ —	○ ○	布施波羅蜜 →一切知の獲得	頭	バラモン (サッカ)	Candraprabha (<i>Dīvyāvadāna</i>)
Mahāsurasena	a15 Zp 28: 342	— —	○ —	布施波羅蜜 →一切知の獲得	半身	バラモン (サッカ)	Candraprabha (<i>Dīvyāvadāna</i>)
Ratanapajota	a4 Zp 23: 285	— ○	○ ○	母の再生 一切知の獲得	心臓	夜叉	
Mahāpaduma	a28 Zp 27: 332	— ○	— ○	母の再生 一切知の獲得	心臓	亡母	

a/b はタイ所伝のもの、Zp はビルマ（ミャンマー）所伝のもの、Sah はスリランカ所伝のものである。中央タイ所伝のパンニャーサ・ジャータカ写本は、39話までの写本と、それ以外の物語の写本に分かれているため、前半写本の物語には‘a’という標識を、後半写本の物語には‘b’という標識を付している。

タイ所伝のものも a6 を除き、ローマナイズされたテキストがあり、[歎部 2008; 2012a]、[田辺 1991; 2005]、[Yoshimoto et al. 2004] のいずれかに収められている。翻訳は a19: [石野 2008]、a27: [吉元 2001a]、a6: [原田 2008]、a7, b8: [歎部 2012a] が存在しており、a13, a28 に関する研究（部分訳）が [茨田 2008] に収められている。

略号

Bv	<i>Buddhavaṃsa</i> : Jayawickrama (1974)
CBETA	Chinese Buddhist Electronic Text Association CD-rom (http:// www.cbeta.org)
Cp	<i>Cariyāpiṭaka</i> : Jayawickrama (1974)
Cp-a	<i>Cariyāpiṭaka-aṭṭhakathā</i> : Barua (1979)
Ja	Jātaka (together with its Commentary): Fausbøll (1877–1897)
JA	Story number in Ja
Khp	<i>The Khuddaka-Pāṭha</i> : Smith (1978)
Paṭham	<i>Paṭhamasambodhi</i> : Coedès (2003)
Sah	<i>Sahassavatthupakaraṇam</i> : Ver Eecke-Filliozat & Filliozat (2003)
T	大正新脩大藏經：高楠・渡辺 [1924–32]
Vism	<i>Vīśuddhimagga</i> : Rhys Davids (1975)
Zp	<i>Zimme Paṇṇāsa</i> : Jaini (1981; 1983)

写本情報

- Otani *Paññāsa-jātaka* palm-leaf manuscript (photocopy), the first part (fragmental: Nos.12–18, 22–39): Otani University Library Acc. No. 26.2–10.
- Tanabe D *Paññāsa-jātaka* palm-leaf manuscript (photocopy), the first part (complete: Nos.1–39): Otani University Library Acc. No. M1/000070/D.
- Rajasiddharam *Paññāsa-jātaka* manuscript (photocopy), the second part (complete: Nos.40–(52)): Wat Rajasiddharam Thonburi 3 (EFEO DATA catalogue Number).

* 資料として使用したタイ所伝のパンニャーサ・ジャータカの上記三写本のうち Otani および Tanabe D は 例前半（第1–39話）写本、Rajasiddharam は後半（第40–50 (52) 話）写本として扱われているものである。ただし、実際の写本のタイトル表記は前半、後半がしばしば逆転している。また、中央タイには一本の写本全体として合計50話の物語が含まれるようなものは伝わっていないようである。これら2種類の写本の関係については〔畝部 2012a: 51–4〕で簡単に考察しておいた。

参考文献

- Barua, D. L. (ed.) 1979. *Achariya Dhammapāla's Paramatthadīpanī: Being the Commentary on the Cariyā-piṭaka*, Pali Text Society Text Series 18, London: Pali Text Society.
- Cædès, George 2003. *The Paṭhamasambodhi* (edition prepared by Jacqueline Filliozat). Oxford: The Pali Text Society.
- Damrong Rajanubhab et al. (ed.) 1956. *Paññāsajātaka chabap ho samut heng chat*, 2 vols., Bangkok: Sinlapabannakan Press (New edition in two volumes is published in 2006.)
- Fausbøll, V. (ed.) 1877–1896. *The Jātaka, Together with its Commentary, Being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha*, 6 vols., London: Trübner.
- Horner, I. B. and Padmanabh S. Jaini. 1985/1986. *Apocryphal birth-stories (Paññāsa-jātaka)*, 2 vols.. London: Pali Text Society.
- Jaini, Padmanabh S. (ed.) 1981/1983. *Paññāsa-jātaka: or Zimme paṇṇāsa (in the Burmese Recension)*, 2 vols., London: Pali Text Society.
- Jayawickrama, N. A. (ed.) 1974. *Buddhavaṃsa and Cariyāpiṭaka*. London and Boston: Pali Text Society.
- Ohnuma, Reiko 2007. *Head, Eyes, Flesh, and Blood: Giving Away the Body in the Indian Buddhist Literature*, New York, NY/West Sussex, UK.: Columbia University Press.
- Rhys Davids, C. A. F. (ed.) 1975. *The Visuddhi-magga of Buddhaghosa*, (first published in 1920). London: Pali Text Society.
- Samuels, Jeffrey 1997. “The Bodhisattva Ideal in Theravāda Buddhist Theory and Practice: A Reevaluation of the Bodhisattva-Śrāvaka Opposition”, *Philosophy East and West* 47.3: 399–415.
- Sheravanichkul, Arthid 2008. “Self-sacrifice of the Bodhisatta in the Paññāsa Jātaka”, *Religion Compass* 2.5: 769–787.
- Skilling, Peter 2006. “Jātaka and Paññāsa-jātaka in South-East Asia”, *The Journal of the Pali Text Society* 28: 113–173.
- Skilling, Peter and Justin McDaniel (eds.) 2012. *Buddhist Narrative in Asia and Beyond*, Bangkok: Institute of Thai Studies, Chulalongkorn University.
- Smith, Helmer (ed.) 1978. *The Khuddaka-Pāṭha: together with its commentary Paramatthajotikā I*, (first published in 1915). London: Pali Text Society.
- Unebe, Toshiya 2009. “Toward an Edition of the Paññāsajātaka: Problems and Solutions”, *Thai International Journal for Buddhist Studies* 1: 44–63.
- Unebe, Toshiya 2012. “Not for the Achievement of a Sāvaka or Paccekabuddha: The Motive behind the Bodhisatta's Self-sacrifice in the Paññāsa-Jātaka”, *Buddhist Studies Review* 29.1: 35–55.
- Ver Eecke-Filliozat, Jacqueline and Jean Filliozat (eds.) 2003. *Sahassavathuppakaraṇam, As a Contribution to the Royal Cremation Ceremonies of Phra Thammarajanuwat (Kamon Kovido Pali VI)*. Bangkok: Sangha Assembly of Region III.
- Yoshimoto, Shingyo et al. (ed.) 2004. *Paññāsajātaka: Thai Recension Nos. 12–18, 22–39 kept in the Otani University Library: Transliteration from Manuscripts in Khmer Script*, Kyoto: Pāli Manuscripts Research Project, Shin Buddhist

Comprehensive Research Institute, Otani University.

- 石野幹昌 2008a (編) Dhammsaṅḍaka Jātaka: [畝部 2008: 41-46]。
- 石野幹昌 2008b (訳) 「ダンマソソダカ・ジャータカ 一タイ所伝パンニャーサ・ジャータカ第19話和訳一」: [畝部 2008: 63-66]。
- 畝部俊也 2008 『パリー語およびタイ語写本による東南アジア撰述仏典の研究』平成17年度～平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書 (課題番号17520046)。
- 畝部俊也 2012a 『タイ国ワット・ラジャシッタラム寺院他所蔵写本に基づく蔵外仏典の研究』平成21年度～平成23年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書 (課題番号21520055)。
- 畝部俊也 2012b 「パンニャーサ・ジャータカにおける捨身 一北伝諸文献との関連をめぐって一」『パリー学仏教文化学』26, pp. 147-168。
- 岡田行弘・岡田真美子 1989 「アキッティ前生物語」: [中村 1982-91: 6.230-231]。
- 勝本華蓮 2002 「作仏の決意 一パリー仏教における abhinhāra 一」『印度哲学仏教学』17, pp. 119-136。
- 勝本華蓮 2006 「Cariyāpīṭakatthakathā と Bodhisattvabhūmi 一パリー註釈書にみられる瑜伽行派の思想一」『仏教研究』34, pp. 173-192。
- 勝本華蓮 2007 (訳) 『チャリヤーピタカ註釈 一パリー原典全訳一』ラトナ仏教叢書Ⅱ、国際仏教徒協会。
- 勝本華蓮 2011 「菩薩と菩薩信仰」、シリーズ大乘仏教3 『大乘仏教の実践』、春秋社、pp. 167-204。
- 上村勝彦 1988 (訳) 「両目を布施したシヴィ王前生物語」: [中村 1982-91: 7.112-121]。
- 辛島静志 1988 (訳) 「布施太子前生物語」: [中村 1982-91: 10.149-257]。
- 下田正弘 2004 「菩薩の仏教 一ジャン・ナティエ著『ア・フュー・グッド・メン』に寄せて一」『法華文化研究』30, pp. 1-28。
- 杉本卓洲 1980 「南方上座部の菩薩について」『論集』7, pp. 1-17。
- 杉本卓洲 1982 「菩薩の捨身行 一ジャータカと法華経の交渉の一側面一」『法華経の文化と基盤』、平楽寺書店、pp. 39-75。
- 杉本卓洲 1986 「施身聞偈の菩薩」『金沢大学文学部論集 行動科学科篇』6, pp. 67-86。
- 杉本卓洲 1994 サラ叢書29 『菩薩 一ジャータカからの探求一』、平楽寺書店。
- スキリング、ピーター (畝部俊也訳) 2004 「東南アジアに於けるジャータカとパンニャーサジャータカ」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』22, pp. 11-74。
- 高楠順次郎・渡辺海旭 (編) 1924-32 大正新脩大藏経、八十五卷、大蔵出版。
- 田辺和子 1981 「タイに伝わる『パンニャーサ・ジャータカ』(50ジャータカ)」『仏教学』11, pp. 65-87。
- 田辺和子 1984 「Paññāsa-jātaka 中の Surūparāja-jātaka について」『印度学仏教学研究』32(2), pp. (59)-(62)。
- 田辺和子 1987 (訳) 「シーラヴァナーガ王前生物語」: [中村 1982-91: 2.6-9]。
- 田辺和子 1991 “Siricuḍaṃaṇi-jātaka of Paññāsa Jātaka”, 『前田惠學博士頌寿記念 仏教文化学論集』山喜房佛書林、pp. 267-274。
- 田辺和子 2005 『大谷大学所蔵貝葉写本 Paññāsajātaka と他伝承の同名本との比較研究』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書 (課題番号13610024)、2巻。
- 中村元 (監修・補注) 1982-91 『ジャータカ全集』10巻、春秋社。
- 長崎法潤 1988 (訳) 「六色牙象前生物語」: [中村 1982-91: 7.220-233]。
- 西昭嘉 2005 (編) “Ratanapajota-jātaka”: [田辺 2005: 2.46-79]。
- 原田正美 2008 (訳) 「タイ所伝 Vipullarāja-jātaka 試訳」: [茨田 2008: 186-190]。
- 干潟龍祥 1954 『本生経類の思想的な研究』東洋文庫論叢第35、2巻、東洋文庫。
- 平川彰 1989 『初期大乘仏教の研究1』平川彰著作集第3巻、春秋社。
- 藤田宏達 1984 (訳) 「因縁物語 (ニダーナカター)」: [中村 1982-91: 1.1-108]。
- 前田専学 1982 (訳) 「幸運前生物語」: [中村 1982-91: 3.294-299]。
- 松村淳子 2002 「ダンマソソダカ王物語 一 Rasavāhīnī の素材に関する一考察一」『神戸国際大学紀要』63, pp. 27-38。
- 茨田通俊 2008 『タイ所伝 Paññāsajātaka の校訂、翻訳と思想研究』平成16年度～平成18年度科学研究費補助金

基盤研究(C) 研究成果報告書(課題番号16520050)。

森祖道 1984『パーリ仏教註釈文獻の研究 —アッタカターの上座部的様相—』山喜房佛書林。

森祖道 1995「パーリ仏教における誓願」『日本仏教学会年報』60, pp. 19-30。

吉元信行 2001a「大谷大学図書館所蔵貝葉写本『スルバ・ジャータカ』」『仏教文化の基調と展開』石上善徳教授古稀記念論文集、山喜房佛書林、pp. 307-322。

吉元信行 2001b『大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本における Paññāsajātaka の文獻的研究』平成10年度～平成12年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 研究成果報告書(課題番号10410008)。

吉元信行 2004「大谷大学図書館所蔵貝葉写本：タイ所伝「パンニャーサジャータカ」の特質 — Mahāpadumajātaka 前半部分を中心にして—」『高橋弘次先生古稀記念論集 浄土学仏教学論叢』、山喜房佛書林、pp. 387-402。

付記

本稿は2011年6月21日、台湾、法鼓佛教学院で開催された IABS (国際佛教学会) のジャータカ関連パネルにて口頭発表したものの一部を元にしている。そのパネルにおいて大きく話題になったことの一つに、本稿でも関説しているような捨身の物語の現代的意義がある。一切を顧みることなく自分の身命(時には妻子まで)を布施してしまうこれらの物語は、現代人の倫理に抵触するものであるし、仏教徒であるなしに関わらず、これらの捨身の菩薩を現代人の理想像として捉えることはもちろん不可能であろう。しかしながら、同年3月の震災の際、まさに自己を犠牲にして他者の命を救おうとされた方々の気高い行いを、われわれは眼にしている。どんなに不合理に見える行動であっても、人は他者のために命を捨てるのが実際にあるし、どんな時代のどんな社会にもそのように気高く振る舞う人は存在していたであろう (cf. 杉本 1986: n. 13)。そして、そのような行為を行った人に対して、あの人は実はボーディサッタであった、あれは仏になるための行いであったと捉えたからこそ、捨身の物語は生まれてきたのではないであろうか。捨身の物語は、もしもこれを法のためには命も捨てよという理想を説くものとして捉えるならば、狂信的な宗教のプロパガンダにさえなり得るものである。しかし、実際にこの世界に生き、気高く振る舞って亡くなっていった人を悲しみ、讃える思いとして、これらの物語を捉え直すならば、大変不合理に見える捨身という行為にも意味を付与することができるのではないであろうか。今回の震災では避難を放送で促すために津波の押し寄せる中に留まったり、寝たきりの老人の救助のために危険な場所へ戻って行って亡くなった方が実際におられた。自分の命のみならず、残される家族のことも顧みず他人の救助を優先した結果である。捨身の物語を知る者であれば、この方々の行いを不合理であると断ずるのではなく、そこに布施波羅蜜や精進波羅蜜の完成を目指す気高い菩薩の姿を見ることであろう。震災後、あれだけの災害にも関わらずパニックに陥ることなく秩序だって行動する日本人の姿に海外の人々から驚きの声が上がったが、ある海外のジャータカ研究者からのお見舞いのメールは、これに関して日本人の「忍辱」に触れていた。これもボーディサッタの十波羅蜜の一つである。ジャータカの物語は、生き方のモデルとしてではなく、実際に気高く生きる人に対する讃嘆・悲歎として捉えることによって、現代的な意味が与えられるのではないかと思われる。IABS ジャータカ関連パネルの発表後の全体討議において筆者は以上のようなことを伝えようと試みたが、言語の問題もあって十分意を尽くせなかった。ここに付記する次第である。

Abstract

Motive behind the Bodhisatta's Self-sacrifice in the *Paññāsa-Jātaka*:
Not for the Achievement of a *Sāvaka* or *Pacceka*buddha

Unebe, Toshiya

In the *Paññāsa-jātaka* transmitted in central Thailand, there are as many as eight stories of self-sacrifice (*ajjhātika-dāna*), where a bodhisatta declares that he carries out his self-sacrifice not to get the achievement of a *sāvaka* or *pacceka*buddha but to attain omniscience. It is said that this declaration seems to be influenced by Mahāyānistic ideal of Bodhisattva. Based on our recent studies on Pāli palm leaf manuscripts of the *Paññāsa-jātaka*, this paper investigates this type of declarations. Further, similar declarations in parallel stories in *jātaka* collections in Sri Lanka and Myanmar, as well as declarations in related accounts in the Pāli *Nikāyas* and their commentaries are examined. (See Unebe 2012 for an English version.)